

2014年1月



2013年は教室内の囲碁大会を開始するなど、生徒の皆様にもご家庭にも囲碁を身近に感じていただける年となりました。生徒さんの中でも日本棋院や関西棋院の級位認定試験に挑戦したり、正式な碁盤である「19路盤」で打てる子も出て来始めました。

19路盤で打つようになると、「棋風」というものが現れて来ます。大きく分ければ以下の2つです。

- 実利派** : 取れる陣地を最初から少しずつ確実に押さえて積み上げて行く。
「地に辛い」という表現をされることが多い。
- 模様派** : 未完成でも良いので自分の勢力を盤上に拡げておいて、最後に陣地に仕上げて行く。
まずは地よりも自分の石を強固にする「厚み」という言葉も使う。



模様派の代表は「宇宙流」と言われる武宮正樹九段。ライバルでもあり、実利派の代表格でもある小林光一九段の碁を「地下鉄みたいで面白くない」と表現し、小林九段が「地下鉄とはうまいことをいう。碁に勝つためには真理だけを見ればよく、他は目に入れる必要がない」と言い返した話は有名です。最近では、全世界的に実利派が増えてきています。

武宮九段は著書「盤上に夢と元気を」(右上参照)の中で、「地は現金。厚みは健康。」と表現されています。現金と健康の両方あるのが一番良いに決まっているけれど、実力が近い者同士の碁で、「地も厚みも」両方あるということはありません。だったら早くから「健康を犠牲にして現金を確保しに行く」よりも、「現金はまだなくても、健康を保っておく方が良い。後からお金は稼げる。」という考え方です。

私は、碁で身につけた考え方は、勉強や仕事、生き方にも投影されて行く、と考えています。

実利100%だったら堅実な生き方はできると思いますが、大きく道を切り拓く存在にはなれないでしょう。また模様100%だったら、大風呂敷を拡げてみたものの、足元にはころびが生じて結局破たんする、ということも起きるでしょう。



そこで私は「実利と模様のバランス」「地と厚みのバランス」を大事にする碁。ただし、「7:3で模様・厚み重視」。という方向でライトスタッフの生徒さんの碁風を育てて行けたらよいな、と現状考えております。現役バリバリのプロ棋士で一人名を挙げるなら、厚み派の代表格と言われておりますが高尾紳路九段(写真)でしょうか。「次に生まれ変わるなら、幕末維新のころか、第二次世界大戦直後の動乱期・激動期に生まれて来たい」という高尾九段の考え方も、ライトスタッフの目指す方向性と近いと感じます。

このバランスは、最難関と言われる中学入試で求められるバランスと同じだ、と考えております。基礎知識や計算力が実利、思考力が模様、ですね。

では、現代日本最強の棋士 井山裕太6冠はどうかと言うと、Wikipediaには以下の記述がありました。

「ヨミの鋭い碁であり、地に辛い碁も厚い碁も柔軟に使い分ける。全局的な発想に長けており、定石研究も積極的に行っている。」
いや、そんなこと言っちゃ誰も勝てないでしょ！ というところですね。もちろんこれが究極の目標であると思います。

なお、武宮九段は先ほどの本の中で、中国・韓国が最近ドンドン強くなっているけれど、「この戦法が有利」となると、こぞって皆同じ打ち方になるのが気に入らない、とおっしゃっています。「自分のスタイルはこれなんだ！」というものを持っているべきだ、というお考えですね。

私もその考えに賛成です。ただ、「美しさ」にこだわる日本の碁が「荒々しさ」に勝つ中・韓に最近分が悪いので、日本の碁の良さを守りつつ、世界で勝てるようになって欲しいと思っています。

これも、碁に限らずこれからの日本を支えて行く人材に求められることですね。